



より良い日本創りへの発信
もうひとつの成人式

「60歳からの主張」入賞者決定

全国老人福祉施設協議会

21世紀は少子高齢、人口減社会。

総務省が発表した2006年3月31日現在の、全国の人口は、1億2705万5025人で前年より3505人減り、1968年の調査開始以来、初めて減少し、人口減少社会の到来が裏付けられました。少子高齢、人口減社会に対応した医療、年金、介護、福祉等、社会保障制度の展望とあり方が問われています。若者のパワーが落ちている今日、60歳からを第2の成人としてのスタートと考え、より良い日本創りへの発信が期待されます。

そこで全国老人福祉施設協議会（会長 中村博彦）では、去る2006年9月19日（月）敬老の日から、11月19日（日）まで、60年の人生で見聞し、経験されたそれぞれの＜味わい＞＜深みを持った＞多様なご意見を「60歳からの主張」というかたちで募集、今年で3回目となります。

募集の結果、全国の60歳以上の皆さんから、重ねた年齢にふさわしい自由闊達、そして超高齢社会に向けた1738通の貴重なご意見をいただき、この度10名の入賞者が決定いたしました。

全国老人福祉施設協議会は、70年余の歴史をもち、高齢者の福祉・介護を担ってきた団体です。今回の「60歳からの主張」を通して、これからの高齢者が何を考え、何を求めているのかを学び、これらを我々のサービス向上に役立てるとともに、我が国の21世紀高齢化施策に反映するよう活動してまいりたいと考えております。

概要および入賞者は別紙の通りです。

連絡・照会先

「60歳からの主張」運営事務局

〒104-8552

東京都中央区新富1-14-8 松永新富ビル4階

TEL: 03-3206-2644 担当: 檜垣・牧岡

< 概 要 >

主 催 : 社団法人全国老人福祉施設協議会
公募対象 : 満60歳以上の男女
公募期間 : 2006年9月19日(敬老の日)から11月19日消印有効
応募テーマ : (A)「社会保障を考える」
(B)自由課題 「超高齢社会を生きる」「60歳からのエンjoyライフ」
「次の世代に伝えたいこと」など政治、文化、スポーツなど
どどんな意見でも可。

応募データ : 応募総数 1738通
: テーマ比 「社会保障を考える」 120通
「自由課題」 1618通
内訳 : 論文 621通 俳句 406通 川柳 356通
短歌 218通 絵 17通

最高年齢 「短歌部門」100歳・女性

審査員 : 赤瀬川原平(作家) 阿久 悠(作家、作詞家)
田中一昭(拓殖大学政経学部教授)

「60歳からの主張」入賞者10名

優秀賞(賞金 30万円)

伊藤成子さん・73歳(東京都中野区) 「“意”を優先した自分発の英語劇」
大石ともやさん・65歳(福岡県福岡市) 「62歳からの旅立ち」
田桐 勲さん・66歳(愛知県豊田市) 「若者と共生 輝いて生きる」

佳作(賞金 5万円)

宇多田正純さん・86歳(千葉県浦安市) 「60歳からのエンjoyライフ
マッチ棒クラフト」
小野明夫さん・70歳(北海道函館市) 「次世代に伝えたいこと」
小嶋勇介さん・76歳(福岡県福岡市) 「福祉ボランティアを生きがいとして」
山崎春一さん・73歳(北海道札幌市) 「妻を愛す」

俳句部門賞(賞金 10万円)

北川まどかさん・94歳(奈良県生駒市)

短歌部門賞(賞金 10万円)

友倉多美代さん・68歳(福岡県筑前町)

川柳部門賞(賞金 10万円)

森岡加代子さん・63歳(島根県浜田市)

表彰式 : 日 時 / 2007年1月29日(月) 17:00~17:45
会 場 / ホテルニューオータニ 「翔の間」
〒102 8578 東京都千代田区紀尾井町4 1

【入賞作品】

優秀賞 伊藤 成子(いとう せいこ)さん・73歳/東京都中野区在住

白百合女子大学英文科卒業後、中学の英語教師となる。

「“意”を優先した自分発の英語劇」

<要旨>

公営・民営を問わず、高齢者の施設(デイサービスセンター)に集う人々の表情に満たされぬ雰囲気
が漂うのは、何故かと、私は以前から疑問を抱いていた。いずれの施設も、「より安全で至れり尽く
せり」を、モットーとしていた。一見正論だが、実はここに問題があった。A施設(公)では、一方
的にその日のスケジュールが決められ、必要な道具一切が用意され、手本通りの指導で個性的な創作、
俗に言う遊び心など皆無、これでは楽しむより、息苦しい。果たして、与えられる事のみが、高齢者
にとって幸せなのであろうか。

だがB施設(民)との出会いで私の疑問が解けた。そこでは「“意”を最優先とした自分発」をモッ
トーとしていた。今日は何がやりたいのかを、一つだけ選んで、用紙に書き黒板に貼る。実はこの協
力者として、私が呼び出された。敬老の日に「シンデレラ」を上演との目標に向い、人気の王子役は
老いても男性、迫力あるジャンケンで、シンデレラは推薦でそれなりの女性を選び、猛練習が続いた
が、全員による達成感の万歳と観客の大拍手で幕が降りるまで、自分発やりたい人達の集りだったが
故に、一人の落伍者を出す事もなかった。

優秀賞 大石 ともや(おおいし ともや)さん・65歳/福岡県福岡市在住

九州大学工学部卒業後、重工業メーカーを経て、平成15年、関係会社退社。

「62歳からの旅立ち」

<要旨>

リタイアして暫くの間は一日の時間の全てを自分のためだけに使える夢のような“毎日が日曜日”で
過ごした。しかし、かみさんと朝から晩まで顔を合わせていると会社勤めのときには隠れていたお互
いの人生観、価値観が衝突し、些細なことでも口喧嘩が絶えなくなった。今更かみさんも私も気性ま
では変えることは出来ないであろう。このまま同じ心の持ち方では2人の関係は破綻していくと思わ
れた。私としては想定外のリタイア生活に突入して3ヶ月ほど経った62歳の春に、予てから関心を
持っていた四国遍路の歩き旅に出た。62歳からの旅立ちである。長い間家を留守にすることにかみ
さんは反対しなかった。彼女も私との距離をおいてひとりになりたかったのかも知れない。

愛媛の大洲の町を歩いていたとき、80歳くらいのお婆さんが10円玉をお接待してくれた。それま
で食べ物や100円玉、500円玉のお接待を受けてきたが10円玉は初めてであった。数日後、歩
いているときに10円玉をくれたお婆さんのことが浮かんで来て、アッと思った。あのときお婆さん
は、たまたま10円玉をお接待してくれたのだ、と私は勝手に思い込んでいた。あのお婆さんは、あ
の町のあの通りで今日も何人ものお遍路さんに10円玉をお接待しているのだ、しかも毎日毎日、何
年も何十年もあのようにしてお接待をしてきたのだ、という想いに至ったとき、涙がとどめなく流れ
出してきた。

優秀賞 田桐 勲（たぎり いさお）さん・66歳 / 愛知県豊田市在住

平成12年、トヨタ自動車㈱を定年退職後、平成16年より光陽自動車㈱にてパート従業員として勤務。

「若者と共生 輝いて生きる」

<要旨>

私は高齢者就職相談室を介して自動車の生産設備を製造する、従業員が数十人の会社へ再就職しました。配属された溶接作業現場は若い人が中心で活気に満ちていましたが、仕事は溶接機の電流調整が下手なことから溶接部品の手直しが続出、高齢者が仕事を求め職場の一員になることは並大抵でないことを思い知らされました。職場の責任者H君28歳に事情を説明して退職を申し出たところ、無骨そうな彼は「俺達は毎日2時間の残業や。おじさんが辞めると、もっと残業が増えるんや」と呟き、横で話を聞いていたH君の同僚N君は「おじさん。あしたも来てや頼むでよ」と。おじさん呼ばわりには少なからず抵抗はありましたが、飾り気がない2人の言葉は徐々に人の温もりを感じさせるものでした。「そうか。俺は職場の若い人達に期待されているんだ思い直して今一度頑張ってみるか」、そう決意して2年数か月が過ぎます。

私は40年勤めた物造りの会社を60歳で定年退職しましたが、この間に培った経験と知恵などを職場の若者に伝承できることも少なくないと自負しています。その一例はこの職場が実践しているQCサークル活動です。職場の問題点を解決するために4～5人がグループを構成して継続的に改善を進める企業内の小集団活動なのです。今の若者はパソコンや携帯電話などIT機器に対しては、極めて柔軟に対応できても「生身の人間」とのコミュニケーションは甚だ頼りないことを実感させられました。こうした時こそ永年、企業の中で人に揉まれ経験を積み重ねた高齢者の出番と考え、積極的に話の輪に入り世代を越えて理解と交流を深めています。

佳作 宇多田 正純（うただ まさずみ）さん・86歳 / 千葉県浦安市在住

昭和26年3月 九州大学工学部土木科 卒後、長野県土木部へ就職。昭和31年 オリエンタル建設㈱入社、仙台支店長を経て昭和55年より大輝測量㈱設計部門の責任者として今日に至る。

「六十歳からのエンジョイライフ マッチ棒クラフト」

<要旨>

その頃の或る日、デパートの家具売場で、サイドボードの上に飾られた模型帆船に目が止まった。長い年月大洋の荒浪や潮風との苦闘をしのばせるその風姿は、まさしく男のロマンを感じさせるものだった。私はポケットを探って、ありあわせの紙片にその帆船をスケッチして帰り、側面図・平面図・断面図を半ば想像を混ぜて引き、早速制作にとりかかった。この時、脳裏に閃いたのがマッチ棒だった。そうだ何かから何まで徹頭徹尾マッチ棒で作ってみよう。これがその後26年以上も延々と続いている私とマッチ棒の深いつき合いの始まりだ。

佳作 小野 明夫（おの あきお）さん・70歳 / 北海道函館市在住

北海道立札幌医大卒業後、日本電電公社へ入社。昭和35年退職後、函館の病院を経て南茅部町国民健康保険病院リハビリ科にて奉職、平成10年定年退職。現在は、少年少女囲碁教室を開設。

「次世代に伝えたいこと」

<要旨>

次世代に伝えたい。そんな大袈裟な事は言えないが、せめて30代の息子や同年代の人達に伝えておきたい。私は働きに出て4年になる。これぞとふんぎりをつける時は死ぬ時ではない。70歳になって背伸びをする時である。現代の人生は80歳代と言われるようになった。元気な高齢者は年を重ねる毎に増えつつある。だが、人間にも賞味期限があるのだ。只なにもしないで、なにも出来ないで生きているだけの人生なら、社会のお邪魔虫にならないようにしなければならない。

佳作 小嶋 勇介（こじま ゆうすけ）さん・76歳 / 福岡県福岡市在住

九州大学法学部卒業。裁判所書記官を経てNHK入社、報道部、考査室勤務。平成2年定年退職。

「福祉ボランティアを生きがいとして」

<要旨>

16年前に会社を定年退職した時、これからの人生を、何を生きがいとして、どう過そうかと考えました。60年間無事に生きてきた自分へのご褒美に、旅行やグルメざんまいで暮らすのもよかろう。しかし、それでは何かむなしような気がする あれこれ考えているうちに、私は忘れていた大事な事に気づきました。「そうだ、私は障害者だった。学生時代から社会人として働かせてもらった昨日まで、自分としては他の人に迷惑をかけないよう頑張ったつもりだが、どれだけ多くの人たちのお世話になったことか。これからも、年金を頂いて老後生きさせてもらおう。であれば、残された人生の中で少しでも社会のお役に立つことをして、お返しをしよう。」

佳作 山崎 春一（やまざき しゅんいち）さん・73歳 / 北海道札幌市在住

漁家の漁師から1959年公立学校の英語教師へ転職。35年間教職につき、定年退職後、中国光州外国語学院東語系日語日文学科講師、韓国釜山市東義大校外国語研究院客員教授を務める。

「妻を愛す」

<要旨>

あの8月15日の朝、妻は階段下の床に倒れていた。壁にもたれて。隣に寝ていた妻の様子が変だなと思いつつも、私はさきに起きて、台所にいたのだが、フト気配を感じて妻を見たときの驚きと、声にならなかった私の叫び。いま思い返しても胸ふさがるのだ。結婚してもう47年、妻は健康で、働き者で、気が強くて、すばらしいハウスキーパーだったのだ。一緒になったとき、私は無一文であった。10円もポケットになかった。長い浪人の末、免許を生かして英語教員になったばかりだった。長い間、書くのを止めていた私の、『私の妻』という詩を載せて、私はますます妻を愛す。

俳句部門賞 北川 まどか(きたがわ まどか)さん・94歳 / 奈良県生駒市在住

明治45年、滋賀長浜生まれ。農業に従事しながら俳句歴70年、現在は奈良の老人ホームで趣味の俳句とともに余生を楽しんでいる。

このままで ふっと消えたし 日向ぼこ

短歌部門賞 友倉 多美代(ともくら たみよ)さん・68歳 / 福岡県筑前町在住

昭和31年、長崎県立猪興館(ゆうこうかん)高等学校卒業後、昭和40年頃より約22年間、化粧品、呉服、宝石販売業務につく。

台風に 追い立てられて 帰り道 再婚話に エールを送る

川柳部門賞 森岡 加代子(もりおか かよこ)さん・63歳 / 島根県浜田市在住

昭和36年、浜田高等学校卒業後、大阪の会社に勤務。昭和43年、結婚を機に退社、現在に至る。

老いてなお 自立・自立と 励まされ